大明會典

江苏工业学院图书馆
藏书章

第十九卷

大田南畝全集　第十九巻　第十九回配本（全二十巻）

一九八九年三月三一日　第一刷発行©

定価八六〇〇円

編集委員代表　濱田義一郎

発行者　緑川亨

発行所　株式会社　岩波書店
〒101 東京都千代田区一ツ橋二-五-五
電話 〇三-二六五-四一一一
振替 東京六-二六四〇

Printed in Japan
ISBN 4-00-091059-0

落丁本・乱丁本はお取替いたします

凡　例

一、本巻には書簡のほか、南畝文庫蔵書目・杏園稗史目録・杏花園叢書目・叢書細目、および識語集を収めた。

1　書簡は編年順に配列し、通し番号を付した。現存のものには所蔵者名を記し、所在不明のものは出典を記した。

2　南畝文庫蔵書目・杏園稗史目録・杏花園叢書目については、それぞれ扉に底本の表紙写真を掲げて所蔵者名を記し、扉裏に書誌的解題を記した。ただし、稗史目録については、「杏園稗史目録について」を誌して解題を補った。

3　叢書細目は、扉裏に収録叢書名を列記して収載の方針を示したが、書誌的解題は叢書ごとに記した。

4　識語集は、叢書細目に採録したもの以外で現在判明するものを集めた。識語に記された年号により、編年順に配列した。◆印を付して書名を記し、その著者名・巻冊数・成立年・所蔵者名を注記した。所在不明のものは出典を記した。

一、翻刻に際しては、校訂上、以下のような処理を施した。

1　改行、句読点

(1) 改行は原則として底本に従った。杏園稗史目録については扉裏の解題参照。

(2) 読解の便宜をはかり、適宜句読点を施した。

2 漢字

(1) 字体については、常用漢字表・人名漢字表による字体を使用し、その他は通行の字体を原則とした。ただし、「寢」「寐」などは併用した。

(2) 反復記号は原則として底本通りとしたが、「ゝ」は「々」とした。

3 仮名

(1) 仮名遣いは底本通りとした。

(2) 平仮名、片仮名とも現行の字体を用いたが、「ミ」「ハ」「ニ」は「み」「は」「に」とした。

(3) 合字の仮名は分割して現行の表記に改めた。

(4) 読解の便宜をはかり、適宜濁点を施した。ただし、書目関係は底本のままとした。

4 振漢字・振仮名

(1) 底本にある振漢字・振仮名はそのまま翻印した。校訂者の施したものは〈 〉で括り、振仮名は旧仮名遣いを原則とした。

5 誤字、虫損・朽損

(1) 誤字と思われるものは該当箇所の傍らに〈 〉によって注記した。

(2) 異本との校合によって脱字が明らかな場合は、本文行中に〈 〉をもって補った。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

(3) 虫損・朽損などにより判読不明の場合は、一字の場合□、二字の場合□□、三字以上の場合「　」で示した。

6 漢詩文

(1) 漢詩文については、ごく一部底本に付されている返り点以外は、すべて校訂者が付したものである。

7 欄外注記

(1) 欄外の注記は本文の該当箇所に〔欄外。○○○○○〕の形で挿入した。

本巻収録書のうち、書簡・識語集は中野三敏、南畝文庫蔵書目・杏園稗史目録・杏花園叢書目・叢書細目は揖斐高が、それぞれ編集・校訂および解題を担当した。

底本および校合本について、貴重な資料の閲覧・使用を許可された所蔵者各位に心から感謝の意を表します。

本巻収録分のうち、叢書細目の中に歴史的差別にかかわる用語があり、差別の克服は今日なお重要な課題であるが、歴史の資料として原形のまま残す必要があると考え、そのまま翻字した。

目　次

凡　例
書　簡……一
南畝文庫蔵書目……三四七
杏園稗史目録……四四三
杏花園叢書目……四九一
叢書細目……五〇一
麓の塵(五〇三)　三十輻(五四三)　群書一穀(五六七)　百瀬川(五七七)　百和香(五八五)　児物語部類(五九三)　白石爛(五九五)　南畝叢書(五九九)　家伝史料(六〇一)　草野史料(六一一)　竹橋余筆(六一五)　鑽故紙(六五五)　瓊浦遺珮(六六一)　沿海異聞(六六五)　海防紀事(六七五)
識語集……六八七

書簡

書簡について　ここに収めた南畝の書簡は、濱田義一郎編「蜀山人大田南畝書簡」上・中・下・続（『大妻女子大学文学部紀要　国語国文学論集』六・七・十一・十三号）を基本に、原簡の所在が不明ながら『新百家説林　蜀山人全集』巻二所収の「尺牘」を加え、濱田編著以降に新出のものは、日本大学総合図書館蔵十一通については粕谷宏紀・田中善信編「大田南畝書簡について」（『文学』昭和六十二年七月号）により、大妻女子大学図書館蔵九通については石川了編「大妻女子大学所蔵大田南畝書簡」（『大妻国文』十九号）により、また大東急記念文庫蔵六通については大東急記念文庫善本叢刊『近世名家書翰集』によって加え、二松学舎大学図書館竹清・馬越文庫蔵、竹清影写の五通およびその他諸家蔵の九通等については、それぞれ直接原簡によって新たに翻字して、編年順に並べたものである。年次不明のものは宛先ごとに区別し適宜配列した。年次の推定は、濱田編著をはじめ所収文献の編者の推定に従ったが、校訂者の判断で変更したものもある。また年月日や宛名等の推定できるものは、〈　〉を付して校訂者の判断を示した。各書簡には通し番号を付し、日付・宛名・所蔵者名を記した。所蔵者名は現在判明している限りで記したが、所収文献に明記してありながら現所在不明のものはその文献名を記した。『新百家説林　蜀山人全集』所収のものは「新百家説林本」と略称した。なお、原簡の所在の明確なものに関しては、極力原簡に即して校訂に努めたが、その際、石川了・大谷篤蔵・白石良夫・多治比郁夫・中村幸彦・宮崎修多・若木太一の諸氏に御協力戴いた。

寛政九年丁巳

1　四月十六日　吉田篁墩宛　（『手紙雑誌』第一号）

篁墩先生　几下　　大田覃　拝復

朶雲飛来拝見仕候。緑陰之候弥御万福被成御座奉欣喜候。然ば御はなし申上候清朝興創事略御原稿本出来候分、態々御もたせ被下辱刮目拝見可仕候。明日耕書堂へ参り候て面談之上早速上候様に可仕候。御蔭にて吾党之もの清朝創業之国事喙三尺を長じ可申候。満洲諸地図も入候て猶又よろしく可有御坐候。いづれ早々承合、書肆参上いたし候様に可仕候。匆々不一

四月既望

尚々、先日も耕書堂へ話候処、長き方はいかほどにてもよろしく候よし申候。三巻にても五巻にも相成候はゞ猶々よろしき様申候。以上

2　閏七月九日　内藤多郎左衛門宛　（佐藤耐雪『出雲崎編年史』）

爾来疎濶打過候。秋暑時候弥平安奉賀候。然ば此新楽間叟と申仁、学友にて御ざ候。隣里にて少し姻縁も有之候。当時隠居いたし雲遊候て其地被参候。御談話の時一寸雁金して愚書。

閏七月九日

越後出雲崎

内藤多郎左衛門様

江戸牛込　杏花園

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

享和元年 辛酉

3　一月二十七日　山内穆亭(尚助)宛　(大妻女子大学図書館蔵)

穆亭君　　杏花園

春寒太甚少々御不快之由、御保褥可被成候。僕義 此間大坂御用被仰付、来月末発足仕候。此節日々出勤多用御座候。二月十日御会之節参上、万々可申上候。匆々不乙

孟春念七

4　四月十九日　山内尚助宛　(新百家説林本)

請取申旅御扶持方之事

米合壱石五升者　　但京升也

但一日壱人五合宛、七人扶持一倍之積、日数十五日

右は銅座為御用大坂表え罷越候に付、為旅御扶持方、書面之通請取申候所、仍如件

寛政十三酉年正月　　大田直次郎

請取申銀子之事

合銀弐拾六枚者　　但丁銀也

此目壱貫百拾八匁

但壱ケ月銀弐枚宛十三ケ月之積

合銀四枚者

此目百七拾弐匁　　賄道具代

金拾五両者（内小粒六両）　　物書料

合金四拾九両者　　雑用金

内小粒　拾九両弐分

但壱ケ月金三両弐分宛之積り、十四ケ月分

金弐両　　筆墨紙蠟燭代

梅天近候両地平安

一二月廿七日発途、渭城夜雨にて御退直も遅く闕面別候事御尤と奉存候。廿八日も微雨、其夜大雨、二十九日は函谷の険を踰え候。（卯時酒二椀傾申候）幸哉朝より雨晴、山上は躡木屐歩行いたし候。畑の立場にて傾盃、頻に二君相豆の遊、邂逅立子玉候事存出し申候処、其夕三島駅にて菊池内記泊と札有之候間、道を心がけ参候処、喜瀬川の東にて轎簾を上て顔を出し候ものを見候へば叔成にて、両方輿をよせ暫傾蓋談話、御噂をも申候。何をいふも途中の事、互に官事にて東西へ別れ申候き。せめて昼にも候はば休み可申候処、泊をいそぐ薄暮なり。夫よりは日々天気よく、宇津の山、薩

埵峠、鈴鹿山等下輿歩行、足疾頓愈、日々二三里づゝ歩行、山水の奇賞不可挙記候。伊勢路よりは花ざかりにて、大津泊早く候まゝ私に三井寺へ参り、絶頂より湖水を望申候。山は八重一重の花の雲の中にて、三上山、鏡山、比良嶽、唐崎、矢橋、勢田の景如夢寐、于今思ひ出られ候。三月十日には京都廻りいたし、祇園、清水花盛にて、知恩院、八阪の塔、東福寺通天橋一覧、伏見夜舟にて十一日朝卯刻に浪華に著申候。夫より日々吏事繁く候へ共、閑暇には八半時頃より所々一覧いたし候。天王寺の古刹、高津、生玉の眺望、天満天神の繁華一々記しがたく候。旅宿は南本町五丁目にて甚寛曠、楼も土庫も有之候。

一私宅にても史記会読候など悴方より申越候。御詩会いかが。宿題御定め候はゞ一月一次づゝにて豚児へ御談じ御極め可被成候。詩は是より上げ可申候。此土にも雅人多く御座候。比隣に久留米樺島勇吉同門の医生馬田昌調と申候もの、関叔成をもよく存居候。和漢の学にて詩は至て好きにて、日々唱和慰客懐候。重て可懸御目候。

一佳作感吟仕候。高和左にしるし候。上巳には金谷宿菊川などの辺にて詩をも賦し申候。其夜は浜松に泊候き。

三島駅遇関叔成自南紀還

東去西来思万重　途中傾蓋喜相逢　路過三島見仙客　来自紀南熊野峯

和山士訓三日見懐用其韵

桃花佳節菊河濱　曲水流觴憶右軍　何日同傾金谷酒　江東暮色隔春雲

用韵は唐人和韵の一体にて、用其韵不歩其字候。此詩御他見御免、帰府迄は人間へ示不申候。
一客舎無事読書罷在候。親朋の一字千金に候間、時々御文通可被下候。豚児方へ被遣候へば一月数度役所便にて不及賃銭候間、無御遠慮幾度にても可被遣候。かさになりても不苦候。猶重てと早々以上

四月十九日　　杏花園

山内尚助様

一島崎氏え申入候。野村仲助は四月廿日頃に立候由にて、古銅吹所、本所法恩寺橋際に有之候。乍去私宅へ是非立より候様先便申遣候。且本田氏書状も届申候。
一出立支度入用残金いさい御書付承知いたし、此間五月分迄御扶持方も取、十四人扶持払弐両壱分弐朱と小玉銀二ツ取申候。用人節倹にて此分にては余り入用かゝり申間舗哉。唯何もかも通帳にて用事足り過申候。二月払之積に候。勝手は甚静にて中々みだりに客来は無之よろしく候。
一交代安岡氏、路用差支候由にて出立前日御普請役立合金七両かし遣候。書附取置申候。尤御褒美済、留守宅定吉へ返済の積に御座候。とかく是は定例之由、たとひ都合宜候てもわざと物入候様に見せかけ、長崎を心がけ候事と相見へ申候。夫故わざと御普請役見候前にてかりし事に候。慥成男に付間違は有之まじく候。
一松蔵事、吉左右承り大慶いたし候。兄弟ともに合力候事は一段之事に候。一円無沙汰にても右之通にさへ成候へば弁損にいたし可申。取込早々以上

〈底本のまま。以下別便なるべし〉

一出立支度之会計委細承知いたし候。今之分にて当分入不申候。先便申遣候安岡氏返金も其表えいたし候積に候。是以此方より申遣候節被遣候てよろしく御座候。少々宿にさし置候方宜候。

一大久保普請出来に候哉。番町御病人はいかゞ。本多氏へも此間栄蔵遣し委細口上之趣申候。相替儀無之由に候。何か気づかりにて一向外出は成不申、小屋の内計の由。扨々夫に引くらべ候得ば此方は安楽にて、門限も無之自由もたり申候。旅宿の奇麗なる事蔵宿之隠居と申内に御座候。石沢山故、石手鉢、飛石など見事に候。勝手向等も竈など甚勝手よろしく候。自由になり候はゞあはれ江戸へ引申度候。玄関前もたゝき土にて内井戸之側は石なり。飲水は川水をこし申候。一月六荷程にて沢山、壱荷十文づゝに御座候。尤呑料にいたし候由用人申候。今年五助は暇取候哉。猶重便可申上候。早々以上

5　四月二十八日　島崎金次郎宛　（新百家説林本）

一大久保、清水、小川町、北町二軒無異大慶いたし候。お仲もます〳〵肥立候由御同慶に存候。

一野村事御世話に御座候。大方廿日過には参可申候。是非々々と申置候処承知之旨申来候。清水鈇吉へ手習筆壱対褒美として可遣候。

一安岡氏之事悴方へ委舗申遣候。甚だ悪風に御座候。

一富原三回忌一向失念罷在候。御世話に候。婆々様へは時々定吉見舞菓子なども遣し可申候。木戸

之婆々格位之事なるべし。

一色々珍談辱候。相場の仰せ越めづらしく候。

一沢村宗十郎は三月廿八日死去、追善発句、絵姿共当月初に一覧いたし候。此絵は幸長崎人見氏へ遣し可申候。あの方にてはめづらしく候。江戸之火事沙汰、御役替等、天気等まで大てい早く相知し申候。乍去地震之事は始て承り申候。とかく異本有之候はよろしく、塙検校の古語候も存出し申候。旅館にては私義も節倹第一にいたし、道中より只今迄同二本にて、二本ともあしく成不申候

一御用人ことの外節倹、甚深切ものにて、犢鼻褌の洗濯までいたし候。市兵衛が魂のりうつり居候と存候。よく〳〵市兵衛へ御伝可被下候。其外も随分よろしく候。質朴なること元禄、宝永時代之人也。

一日々小遣はさのみ入不申候。酒は樽や弟くれ候まゝ也。平井之方一向沙汰なし困り申候。催促状出候間早く御とゞけ可被下候。

一幟至て小し。人形はことの外大造にて、見せ売有之候。幟たま〳〵見請候所たゞ一本にて、子持筋紋所二ツ、下に鍾馗を染候など節倹之体大笑〳〵。

一夏物安売上申候。岩城三井之ミセにて夏合羽、夏火事羽織送らず誂候もの有之、あきれ申候。以上

四月二十八日　　杏花園

島崎金次郎様

〈底本のまま。以下五月十六日以降二十五日まで出しの別便なるべし〉

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com